

《書 評》

イエズス会の日本人聖職者養成とヨーロッパ人宣教師の実像(漢訳)

——高瀬弘一郎著『キリシタン時代の文化と諸相』紹介を兼ねて——

日埜 博司

私の親友でポルトガル在住の中国人歴史学者である金國平(Dr. Jin Guo Pin)という人物がいる。普段私は、尊敬と親しみを込めドウトール・ジンと呼んでいる。

金國平は中世から現代までを手広くカバーする中葡・中欧交流史研究の大家であるとともに、フェルナン・メンデス・ピント『ペレグリナサン(東洋遍歴記)』の全漢訳を初め、きわめて精力的なポルトガル文学翻訳者としても令名が高い。

私も無論そのひとりであるが、金國平の闊達で親切この上ない人柄を慕う学徒は少なくない。呉志良(Dr. Wu Zhiliang)——澳門基金會(Fundação Macau)の最高執行理事のひとりとして極めて多忙な日常を送りながらマカオ政治史を軸にハイレベルな著述を世に問い続けている——ら中国国内で活躍する優れた中欧交渉史家をこれまで幾人も育てているから教育者としての功績も多大である。まさに「名師出高徒」(“De bom mestre, bom discípulo.”)というところか。

その金國平から電子メールをもらったのは、私が2004年度在外研修先として選んだリスボア新大学社会人文学部海外史研究センターで勉強しているときであった。彼は、掲載誌やら刊行予定日やら具体的には明らかにしてくれなかったが、とにかくマカオ史に関する論集を中国語で編むことになった、いろいろな分野なりトピックごとに執筆の適任者を探しているのだが、日本・マカオの宗教的交流からひとつテーマを選びお前自身が何か書け、という注文を申し越してきた。

私は即座に返信メールを送った。大体次のようなことを書いたと記憶する。これは到底私の任ではない。遠慮したり謙遜したりしているわけではない。その代わり最適任の日本人学者による最高水準の仕事なら熟知しているし、場合によっては私がその方の論考をポルトガル語へ直したい。日本のキリシタン史家高瀬弘一郎(慶應義塾大学名誉教授)の最近の研究テーマこそドウトール・ジンの意向に最も副うものだ。彼の大部な近著『キリシタン時代の文化と諸相』(八木書店, 2001年, 647頁)の第2部がマ

カオを軸とする日本キリシタン史に関する重厚な論考集となっている。キリシタン史にマカオが果たした役割の重要性を改めて理解するにはここから 1 篇でも数篇でも選び出し翻訳・紹介するのが最もよいと思う。マカオを舞台としたキリシタン史研究が、これまで誰によっても利用されたことがない教会側未刊史料に依りつつ日本人学者の手で詳密に進められていることは、周知に値すると思うが、どうだろうか。

『キリシタン時代の文化と諸相』第 2 部の内容は以下のとおりである。

第 1 章「キリシタン時代マカオにおける日本イエズス会の教育機関」(57～105 頁)

第 2 章「マカオのセミナリオ」(106～162 頁)

第 3 章「マカオ・コレジオの創設をめぐる諸見解」(163～248 頁)

第 4 章「マカオ・コレジオの教育内容と院長の職掌」(249～281 頁)

第 5 章「マカオ・コレジオをめぐる機構上の諸問題」(282～310 頁)

第 6 章「巡察師ヴァリニャーノの死およびマカオ・コレジオの院長、プロクラドール」(311～347 頁)

第 7 章「マカオ・コレジオの全容とその居住・滞在者」(348～361 頁)

第 8 章「マカオ・コレジオの経済基盤をめぐる諸問題(1)―その収支―」(362～405 頁)

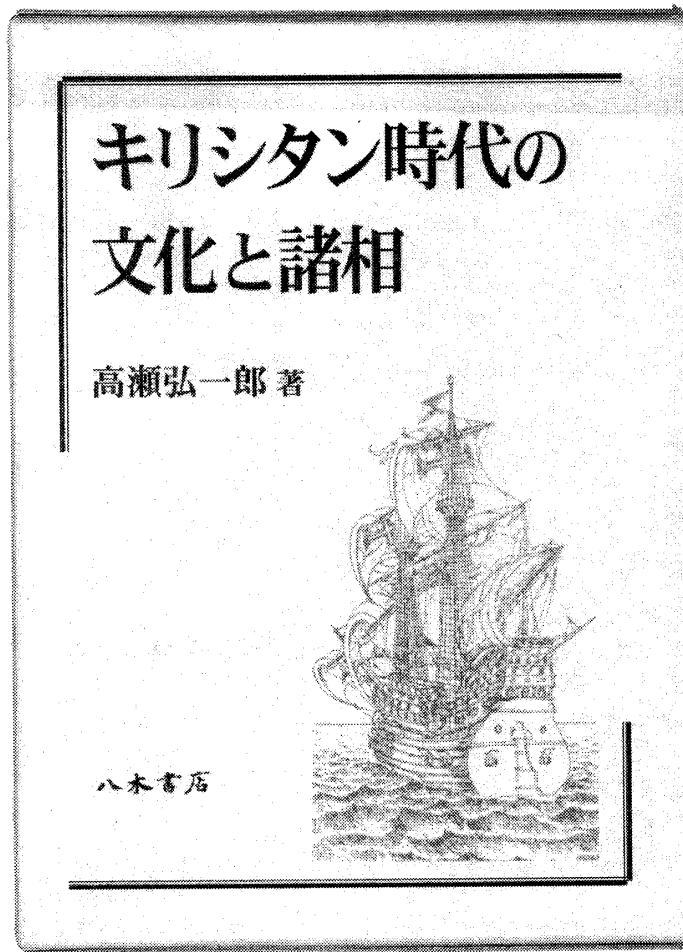
第 9 章「マカオ・コレジオの経済基盤をめぐる諸問題(2)―マカオ・コレジオと日本―」(406～425 頁)

第 10 章「マカオ・コレジオの改組と日本人生徒」(426～504 頁)

第 11 章「マカオ・コレジオの蔵書」(505～543 頁)

金國平からすぐにメールが来た。今回は統一的な編集方針によって翻訳作品は掲載しない。高瀬教授の業績を具体的に紹介するような実質的内容で構わないが、形式上は必ずお前の *autoria* (*authorship*) で書けと。

というわけで、文字どおり書くことを余儀なくされたのが、私のエッセイ「イエズス会の日本人聖職者養成とヨーロッパ人宣教師の実像」である。この日本語原稿は 2005 年春に帰国してまもなく金國平のもとへ送信したのであるが、驚いたことに、ほんの 10 日も経たぬうちに、中国語へ直されしかも金國平による内容的観点からのチェックまで入った訳稿が私のもとへ送り返されてきた。その仕事のあまりの素早さときたら、丹精と熟慮を旨として、など口当たりのよい言い草を常からの遅筆あるいは遷延の口実としている私のような手合いにとって驚き以外の何物でもなかった。



送り返されてきた中国語訳の出来栄えに疑義を懐いたわけでは毛頭ないが、私とて言葉を心から大事にしたいと思う者の端くれ、そのクオリティーを検証してみることは決して金國平に対する背信やら失礼やらには当たるまい。幸い私の身近には古田朱美教授という中日バイリンガルがおり、しかも平生から親しくお教えをいただいている間柄だ。古田氏に一読を乞うたところ、難のない自然な中国語であってすらすら読むことに何ら支障はないという。みずからの日本語が中国語へ直されたのであるから、ニュアンスや細かい語法は無理でも大筋で誤解なり逸脱なりがあるかないか、くらいなら私にも何となく判る。今回は簡体字を用いての翻訳であるが、きちんとした繁体字の——こんな表現をするのはあの簡体字が個人的にどうも好きになれないからなのだが——広東語で書かれていればもっとよく判るかもしれない（言うまでもなくマカオは香港とともに純粋な広東語文化圏に属し、これらの特別行政区内では広報もマスコミも出版も、もちろん日常会話も圧倒的に広東語が優勢である）。

とにもかくにも拙文が中国語に訳されるという経験は無論初めてのことであり、嬉しくありがたい。ところが残念なことに掲載誌はなぜかまだ刊行に至らぬようである。注文されたはずの原稿を送って数

年が経過し、連絡もないままてっきりボツにされたと思い至った頃、ひょっこり掲載誌が送られてくるなんてことは、まあ、ポルトガルでは“よくあること”なので気長に待つとしよう。未知の翻訳者が作成してくれた中文を本来の掲載誌より一足先に公開することにためらいがないわけではないが、掲載の趣旨を少々変更し日本語オリジナルの概要も附すということで、金國平の了承を得たいと思う。中文翻訳者の名はなぜか明かしてもらえないのだが、その方へも衷心よりの敬意を捧げる。

この翻訳は本誌の区分による「翻訳」の範疇には含めない。「研究ノート」めいたエッセイの形式をとってはいるが、拙文をそうした分類に突っ込む蛮勇も私にはない。一読して明白なように拙文のねらいは、教会側未刊史料を縦横に駆使してキリシタン史研究に前人未到の境地を拓きつつある高瀬弘一郎教授の近著とその関連著述群に 100 パーセント依りつつ、中国人学者にはもちろんヨーロッパ人研究者にも未知に属すると思われる新知見を物語風に披瀝することにある。少々考えた末、この翻訳は「書評」のジャンルで公にするのが最もふさわしいと判断した。

脚注における未刊史料からの引用文について特にお断わりをせねばならない。これらはすべて私が高瀬教授の玉稿「キリシタンと統一権力」(『岩波講座 日本歴史 近世 1』[岩波書店, 1975 年]に初出。『キリシタン時代の文化と諸相』[八木書店, 2001 年]に再収録。『流通経済大学論集』通巻 152 号[2006 年]に訳者緒言とポルトガル語訳を、同通巻 153 号[2006 年]に日本語原文をそれぞれ掲載し、ポルトガル語訳はポルトガルやマカオではなく日本で上梓される予定の拙作『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注に附す序論として収載する)をポルトガル語へ翻訳したときその査読をお願いする過程でお教えいただいたものである。

では以下、日本語原文(概要)を 9 号活字で、引き続き中国語訳を 11 号活字で掲載する。

日本語概要

イエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノは日本キリシタン史にきわめて大きな足跡を遺した人物である。その布教政策は世に「適応主義」と呼ばれる。外面的な作法・マナーに関する限り、日本の流儀に順応して日本人との間に心理的摩擦を起こさぬよう努めるとともに、日本人の適性・能力に大きな信頼を寄せつつ日本人を教育し順次パードレやイルマンに叙階してゆく、というのがその具体的内容である。

イエズス会総長エヴェラルド・メルキュリアンは、日本人聖職者養成に関するヴァリニャーノのこの方針を是認する。これに鼓舞されてヴァリニャーノは、日本布教長フランシスコ・カブラルの猛反対を排除、日本各地にコレジオ・セミナリオ・ノヴィシアードといった教育機関を設置、日本人に対する教理教育に着手する。

しかし日本人聖職者養成に対する反対論は日本イエズス会の内部で思いのほか強力であった。たとえば、ロ

レンソ・メシアは、日本には夥しいキリスト教徒がいるが、彼らはただ洗礼を受けただけであって一体何人が本当の信仰を持っているか、私（メシア）は知らない。毎年やってくるポルトガル船に対する関心から信者になるのが常である、と早い時期に述べている（1579年12月14日付け、口之津発、イエズス会総長宛て書翰）。メシアはさらに、日本人イルマンは二心を有する。ひとつは外に対するもので、もうひとつは内に向かうものである。後者は他人には窺い知ることができぬ。安易に日本人のイエズス会入会を許すと将来に禍根を残すことになる、とも記す（1584年12月8日付け、マカオ発、イエズス会総長宛て書翰）。

いわゆる「キリシタンの世紀」における日本人キリシタンの信仰がいかん“模範的”であったかは、確かに、公開されて広く読まれることを前提としたルイス・フロイス『日本史』や『イエズス会士日本書翰集』には縷々書き連ねてある。けれども、イエズス会パードレ自身によってしたためられた公開を前提としない機密性の書翰には、上記の如き「教化的」史料には決して記述されない「事の真相」が明記されていることがままある。

いみじくもカルロ・スピノラは、「大勢がキリスト教徒になり、我らに近づいてきて、我らを自分の土地に招くのは、必要な時に我らから支援を受け、我らから銀を借り、南蛮船が着いた時に、生糸や新種の反物を我らの手で買い入れてもらうためだということが、経験によって私には判った」と記述しているし（1615年3月25日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰）、ペドロ・デ・ラ・クルスは、「最も改宗の程度の浅い」キリシタンは、「障碍が起こると、受洗したこと、またはキリスト教徒であることのそぶりを公にはもちろん、内密にもまったく見せず、その事実を認めることすらもしない」とさえ述べる（1599年2月25日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰）。

ヴァリニャーノの主唱により、1594年、イエズス会はマカオ・コレジオの創設に漕ぎつけた。華南のマカオに設立されたとはいえこのコレジオは、日本布教により大きな情熱を注ぐヴァリニャーノの意向を反映し、主として日本布教を担うための機関として機能した。

ヴァリニャーノは、次のような理由を列挙し日本人をマカオのコレジオに入学させて教育することが必要な理由を説明する（1593年1月1日付け、マカオ発、イエズス会総長宛て書翰）。

1、日本人は「優雅に話したり書いたり、本を読んだりするために彼らの仮名と漢字を学ぶことに非常に没頭する」など、「彼ら自身の慣習や外面的儀礼に非常に固執する」。したがって、キリシタンとしての「堅固な徳操」を身につけるためにも、ヨーロッパの学問に精励するためにも、一定期間日本人をマカオ・コレジオへ移し、ヨーロッパ・カトリック世界の諸事に専念させる必要がある。

2、日本人とヨーロッパ人との間には、慣習や行動様式に関して天地の違いがある。教会の内部にあつては、日本人がヨーロッパ人へ適応する努力を払う必要がある。ヨーロッパ人イエズス会士は日本に行けば日本人の協力なしには何もやれないのであるから、日本人を「ポルトガル人の間で生活させるため、そして必要に迫られ

て我らの言語と慣習を習得させるため、暫時彼らを日本から移す必要がある」。そして、毎年数人ずつ日本人イルマンをマカオへ送り、時間をかけて全員をマカオで教育すれば、皆、「別人になって日本に戻ることが可能になる」。

創設直後のマカオ・コレジオに関しては、巡察師ヴァリニャーノが作成した学則・内規と言うべき史料(1597 年 10 月作成)が伝わっている。これによってマカオ・コレジオにおける日常の教育活動の現実をよく判明する。その章立てのみを下記に示す。

第一章 学習全般に共通する幾つかの事柄について

第二章 授業日と休日

第三章 ラテン語のクラスについて

第四章 教養科目の課程について

第五章 倫理神学について

第六章 教理神学について

さらに、ヴァリニャーノみずからがコレジオの院長だけに与えた規則を読むと、ヴァリニャーノがマカオで学ぶ日本人イルマン(パードレ叙階候補者)へ払った配慮の細やかさが判る。たとえば、

1, 日本人は清潔さに欠けることを極度に嫌うので、食堂・厨房および住院全体の清潔保持には特に心がけよ。

2, 日本人は健康のため、そして清潔保持のため、幼少時から身体を常に洗う習慣を持つ。住院の内部に日本風の風呂場を作り、日本人イルマンのために湯を沸かし毎月 1~2 度は彼らが入浴できるようにしてやれ。

3, 日本人は茶を飲んで健康の保持を図る。コレジオには常に「日本風に淹れた茶の湯 chanoyu」を用意しておけ。

4, 日本人はヨーロッパ人ほど濃厚な食事は摂らないが、栄養源として大蒜をよく食べるからその配慮を忘れるな。

5, 日本人は「カレー味の鶏肉」には容易に順応するので、これを頻繁に供してやれ。

6, 日本人イルマンがポルトガル語に上達するよう、マカオ滞在中は毎日、その教授と学習に 30 分を費やせ。特に「名詞の前に置く冠詞の違い、動詞に用いる時制の多様性、さらには性の違い、名詞の単数・複数の違い」をよく理解させよ。日本語にはこのようなものが全然ないので、よく教えてやらないと日本人は話すときに簡単に間違えるのだ。

ヴァリニャーノの配慮は、教界および俗界の日本人とこれから交際することになるヨーロッパ人に対する忠告に

まで及ぶ。たとえば、

1, これから日本へ赴任するヨーロッパ人は、マカオ・コレジオでは日本風の軽い食事に慣れるよう努めよ。日本人は通常獣肉を食べず魚を常食とするから、ヨーロッパ人も週に何度かは魚を食べる習慣をつけよ。

2, 日本人は生来引っ込み思案なので、もしもきつい言葉で彼らを叱ると、非常に悲しむ。これでは日本人を離反させるだけだ。日本人を叱るときは、何を間違えたのか、理由を挙げ穏やかな言葉で教えてやれ。

3, 日本行きを予定しているヨーロッパ人はマカオで待機している間、委嘱を受けた教師から常に日本語の授業を受け、日本へ赴任するときには充分日本語に上達しているようにせよ。

日本人聖職者の養成と、それを目的としたマカオ・コレジオの創設と経営。これはヴァリニャーノが生涯を賭けて懐いた悲願のひとつであり、その熱意は死の間際になっても衰えることがなかった。

ところがヴァリニャーノの立案したマカオ・コレジオ創設論は当初から多くの反対論に曝された。ヴァリニャーノの布教方針に真っ向から異議を唱えるカブラルは反対論の論拠を下記のとおりに幾つも示す。

1, 日本人は分派を好む性癖がある。日本の宗教は、その初期こそ単一であったにもかかわらず、今では多種多様な宗派に分裂している。日本教会をひとたび日本人の手に委ねれば、デウスの法においても同じような分裂が起こり、多くの異端が生まれる懸念がある。キリスト教を奉ずる強制的で絶対的な権力は日本には存在しないから、そのような教会分裂(cismas)がひとたび生ずればこれを是正する術はない。それゆえ日本人にキリスト教の教理教育を与えるのは危険であり、日本人をイエズス会に迎え入れたり司祭に叙階したりすることは絶対に避けるべきである。

2, ヴァリニャーノは、日本人をマカオに連れてきてこれを教化し、ヨーロッパ人と協調・融和させようとするのだと言う。しかし日本人にそのような期待をかけるのは無理である。パードレたちが日本で追求するものは、虚構をたくらんだり、生活の糧を求めたりすることではなく、ただ日本人を救済することだけだ、と主張しても、日本人はこのことが絶対理解できない。それにマカオのように教俗両界において躓きに満ちた場所へ日本人を連れてくること自体、非教化の極みである。

3, 中国人の日本人に対する憎悪は甚だしい。日本人を嫌悪すること、まるで仇敵や盗賊に対するが如くである。現に今、日本人は中国人に対して名目のない戦いを仕掛けている。そのような中国人の土地(すなわちマカオ)に日本人のためのコレジオを創設することを、中国人は絶対に容認しないであろう。ポルトガル人が日本の王たちや領主たちに唆され、マカオ・コレジオを根城に日本人と合流、これと一致結束して中国人に対し蜂起を企てるのではないかと、臆病で猜疑心の強い中国人は疑うかもしれない。

カブラルはこのように日本人を聖職者に登用すること自体を論外と考えたが、フランチェスコ・パシオのように、

ヴァリニャーノとカブラルそれぞれの意見を“折衷”したかのような見解を展開する者も現われた(たとえば1596年1月30日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰)。

日本人が司祭職に対する適性を有するか否かに関するパシオの見解は、カブラルのそれと本質的に変わらない。日本人は信仰面において若く浅く、特に禁欲・貞潔の誓願を冒す危険性が高い、と言う。それに加えて、パシオがみずからの「経験」に照らして特に危惧したのは、日本人をパードレやイルマンに昇進させると、彼らが同宿(教会の雑務や、伝道・通訳を担当する助手。非イエズス会士)であった時には喜んでやっていたことを嫌がってやらなくなるのではないか、ということであった。

パシオは、イエズス会パードレ候補者として迎え入れる日本人は最優秀のイルマン少数だけに止めるよう主張する。しかも、彼らの修練期間が終わっても、40歳くらいまでは再びレジデンシアへ入れて奉仕をさせねばならないと述べる。パシオによると「この年齢で司祭になれば、そしてこれだけの証があれば、貞潔の点でも傲慢の点でも、さほど危険ではないであろう」というのである。

パシオの見解に見えるように、日本布教に際しては日本人の協力が不可欠なことを熟知しながら、あくまで日本人をヨーロッパ人聖職者の補助要員に止めておこうとする、そのような態度の最も露骨な一例として想起されるのは、カルロ・スピノラの次のような言葉である。

スピノラは、日々の仕事の重荷に堪え、しかも非常に信仰心に篤い同宿を賞讃する。しかし、同宿は非イエズス会士であるから、万一、彼らがしくじりを犯しても、イエズス会の名誉は毀損されない、とスピノラは述べる。イエズス会はこのような助手を受け入れ、「日本人の国民性に欠けている謙虚と従順の精神」をもって、彼ら数人をイルマンにまで養成したが、しかし「この黒ん坊」どもがパードレに昇進するため、ひとたびラテン語などの学習を始めるや否や、彼らは謙虚さを失い、もう我らの役には立たない、とスピノラは悪態をつく(1617年3月15日付け、長崎発、イエズス会総長補佐宛て書翰)。スピノラはさらに、イエズス会士であるイルマンよりも、非イエズス会士の「同宿のほうに靈魂のことに熱心なのを見るのは確かに驚くべきことである」と、その篤い信仰心と、謙虚で旺盛な仕事ぶりを褒め上げておきながら、財政的に窮迫した現在のような時には、同宿なら、そのたびに「切り捨てることできる」と、その狡猾な本音を躊躇なく吐露している(1614年3月23日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰)。

スピノラが思わず書き記した「黒ん坊」という言葉に象徴されるように、南蛮人宣教師の日本人に対する蔑視観念は相当に根強いものであった。ポルトガル人マテウス・デ・コウロスは、同胞の巡察師フランシスコ・ヴィエイラを次のように批判する。曰く、私は、ポルトガル語の単語を解する日本人従僕が、日本人のことを侮蔑して言うヴィエイラの言葉に気づきはせぬかと恐れる、と。コウロスによると、ヴィエイラは日本人のことを「けだもの」とか「黒ん坊」とか「野蛮人」とか呼んでいたらしい(1619年9月25日付け、長崎発、イエズス会総長補佐宛て書翰)。

フランチェスコ・パシオもまた、日本人を聖職者に登用することには反対であった。その有力な論拠として彼は、日本人は特に禁欲・貞潔の誓願を冒す虞が高いという一事を挙げる（前出、1596年1月30日付け書翰）。パシオと同様の懸念を懐いたヨーロッパ人イエズス会士として、ジョヴァンニ・バッティスタ・ポーロがいる。彼によると、不干斎ファビアンを初め幾人もの日本人イルマンたちが「比丘尼たち」との同棲生活に耽った末、イエズス会を脱会してしまい、イエズス会は多大の不名誉を蒙ったという（1611年9月20日付け、日本発、イエズス会総長宛て書翰）。

日本人聖職者にそのような貞操観念を求めるのなら、ヨーロッパ人イエズス会士は皆、この点、一点の曇りもない聖人のようであればならぬはずだ。しかし——。イエズス会随一の日本通として知られる通事伴天連ジョアン・ロドリゲスの日本退去の裏には、長崎代官村山当安の奥方との秘められたスキャンダルが絡んでいたらしい。マノエル・ディアスというイエズス会士は総長に訴えて一種の“公益通報”を行なう。日本にいたイエズス会士ふたりが女性スキャンダルを起こしてマカオへ送られてきたことを伝える文章に続く記述である。

「日本には、この問題で何らかの堕落があった、と彼らは私に語った。通訳である盛式四誓願司祭ジョアン・ロドリゲスもそうである。彼らは次のように私に語った。ジョアン・ロドリゲス師は、長崎で同伴者もなしに、単独で、長崎市のふたりの統治者のひとり当安の妻を訪ねることを常としていた。非常に親密な間柄で、時折小用をするときに彼女と一緒に便所へ行ったほどである。そしてしばしば彼女の着物の中に手を入れて胸に触った。それを彼女の召し使いたちが見ていた。召し使いたちを通して、彼女の夫がそのことを知った。それ以後、夫は彼女を虐待し、他に妾たちを置いた。そして同パードレとの仲を断乎断絶し、これを日本から追放させることまでした。ただし、当安が同パードレを追放するよう掛け合ったときには、他の理由を列举した」（1615年12月6日付け、マカオ発、イエズス会総長宛て書翰）

ディオゴ・デ・メスキータも、女性がらみの風紀の乱れに論及する（1605年3月9日付け、長崎発、イエズス会総長宛て親展書翰）。メスキータは総長に対し、イエズス会士たちがカーザの内外で日本の女性と「親密な交際をする」ことに関しゆきすぎが行なわれ、慎重さに欠けるところがあるので、模範的に振る舞うよう指令を下して欲しい、と要望する。さらに、「女性の告解を聴く方法は概ね改善された」けれども、「何かを食べたり、葡萄酒を飲んだりすることに彼女たちを招待するような親密さと丁重さ」に関しては、「すでに行なわれている慣習」であるからこれをやめたがらない者もいる、という。「なぜなら、それは肉体的な苦痛ではなくて楽しみを与えるものだからである」というメスキータの言葉は、何とも意味深長というほかはない。

さて。日本国内のコレジオやセミナリオで、続いては、マカオのコレジオやセミナリオで、日本人に対する教育が行なわれるようになると、そこでの成果に照らして、日本人聖職者養成の可否に関する問題が、イエズス会士の間で一層の論議を呼ぶことになる。

ヴァリニャーノは、自分の考えに反対した日本布教長カブラルを辞任に追い込んでまで日本人聖職者の養成に執着したものの、僅か 10 年後の第 2 回日本巡察を終えて記述した 1592 年の報告書において、日本人の評価を大幅に修正、この問題について後退の姿勢を見せている。ヴァリニャーノはそれでもなお、日本人が十分な教育と陶冶を経て良き聖職者となることに僅かな期待をつないでいたが、ヨーロッパ人イエズス会士の中には日本人のパードレ叙階に反対する者が続出している。

たとえば、イエズス会士の中でも群を抜く日本学者であった通事伴天連ジョアン・ロドリゲスが、長い日本での生活とセミナリオで日本人を教育した体験によると称して、日本人をイエズス会に入会させることすら十分に慎重であらねばならない、と主張したことは日本人研究者の間では古くから知られている(1598 年 2 月 28 日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰)。

一方、日本に着任するふたり目の司教として 1598 年に渡来したイエズス会士レイス・デ・セルケイラは、日本人司祭を養成する必要を感じ、従来行なわれてきたイエズス会の教育活動の成果を継承して、1601 年、初めて日本人 2 名をパードレに叙階した。新しく誕生した日本人司祭の貢献を高く評価したイエズス会士もいる。ディオゴ・デ・メスキータの意見はその代表であろう。しかし遺憾ながら、これは決して在日イエズス会士の多数派の声を代弁したものとは言えない。

前出ポーロが明らかにするように、折悪しくその頃、日本人イエズス会士の中から醜聞沙汰を起して脱会する者が相次いだ。ポーロは、不干斎ファビアンを初め何人もの日本人イルマンが不名誉な事件を起して脱会したことを述べた後、日本人はイエズス会に入れず同宿の身分のままにとどめ置いてパードレに奉仕させるのがよい。そうすれば彼らが過ちを犯してもイルマンと違ってイエズス会の不名誉にはならないからである、と強調している(前出、1611 年 9 月 20 日付け書翰)。この考えは、すでに紹介したスピノラの見解と奇妙なほど一致している。

これに対し、従来から日本人聖職者を重用しなければならないという考えを懐くメスキータは、何人かの日本人イルマンが脱走したのは、永年の間ラテン語を学ばせて司祭になる期待を懐かせておきながら、結局彼らを登用しなかったからである、と日本人に対するイエズス会の処遇のほうにこそ問題があった、と主張する(1611 年 3 月 24 日付け、長崎発、イエズス会総長宛て書翰)。同じメスキータは、ヨーロッパ人イエズス会士が同国人の会員のみを用いて日本人会員を差別しているかのような感じを彼らに与えないようにしなければならない、とも訴える(1613 年 3 月 10 日付け、長崎発、イエズス会総長宛ての書翰)。不干斎ファビアンが棄教後に執筆した『破提字子』の中で、南蛮人伴天連は高慢なる者どもであるゆえ日本人を人とも思わぬ。そのうえこれからはもう日本人を伴天連にするなという命令が出たそうで、日本人は皆、面白くもない、と記述していることが想起されよう。

メスキータの熱心なアピールはむしろ、彼のような意見が日本イエズス会の中で少数意見にすぎなかったこと

を示しているとも言えよう。前出ポーロは、「日本人の中から徐々に大勢の者が司祭職に就いてゆく。パードレたちはひとり残らずこのことを非常に憂慮している。そして彼らの昇進が神の栄光のためになるようひたすら神に祈っている」と記す（前出、1611年9月20日付け書翰）。

このような日本人会員の評価をめぐる種々の報告を受けたローマのイエズス会本部は、この問題に関しどのような裁断を下したのであろうか。

イエズス会総長クラウディオ・アクワヴィヴァは、「ファビアン脱会その他何人かの同宿について経験したところに鑑みて、日本人を司祭職に就ける際には充分考慮を払う必要がある。彼らのことでこれ以上我が厄介に巻き込まれぬようにするためである。日本人イルマンに対する待遇に関しても慎重を期すよう尊師に負託する。彼らに関する十分な経験を積み、そしてその徳操の高さが保証されない限り、彼らをパードレに昇進させてはならない」と、日本人を安易に司祭に叙階することを戒めている（1611年1月1日付け、日本準管区長宛て指令）。

総長アクワヴィヴァは、日本人イルマンの脱会と追放が相次いでいることを重視、彼らを充分監視しなければならない、日本人をあまり重用してはならない、日本人はよきカテキスタ（Catequista、伝道士つまり同宿）として働かせるべきで、ラテン語などの学習に関してもそれに必要な程度の知識を与えるだけにせよ、と指令している（1612年3月28日付け、日本準管区長宛て指令）。

そしてついにアクワヴィヴァは、「日本人は、司祭になったりイエズス会に入会したりするより——彼らを完全にそこから排除してしまうわけではないが——同宿として働く方が役に立つので、彼らにラテン語を学びたいという気持を起こさせないようにするのがよい。〔中略〕日本人をイエズス会に入れたり司祭に叙階したりする場合は、大いにそれを規制して極めて慎重に行なう必要がある。それゆえ、管区長が顧問たちに諮った上で判断してそれを許し、そしてただちにそれについて本部に報告する、というケースもごく稀にはあるが、そうでなければ、日本でその件について相談して我らの許へ情報を送り、そしてそれに対する我らの回答を受け取るまでは、日本人のイエズス会入会も司祭叙階も認めてはならない」と命ずるに至る（1615年2月1日付け、日本管区長宛て指令）。

すなわち、日本における教会活動には日本人の協力が必要だということは認めながら、教会内で日本人にヨーロッパ人と対等の立場を与えることをせず、それを同宿の地位にとどめ置いて奉仕させるほうがよい。そのために必要な知識を与えれば充分だ、という考え方である。

こうして日本人の入会とパードレ叙階に関するイエズス会本部の方針は、もはや従来よりもさらに後退し、その門戸は厳しく制限された。大半の在日・在澳イエズス会宣教師がこの問題に関して唱えた消極論・反対論の反映と見なすほかあるまい。イエズス会総長がこのような方針を固めた以上、日本人司祭の叙階を積極的に推進しようとする熱意は消滅するに至ったと判断してよい。

巡察師ヴァリニャーノと布教長カブラルとの論争に端を発した日本人司祭養成の是非をめぐる論議は、否定的見解が圧倒的優位に立つ勢いで収束に向かいつつあった。

ところがこの頃、すでに江戸幕府は全国的な禁教令を発布、教会活動には大きな支障が生じていた。たとえば長崎には、キリシタン宣教師を匿いたいけれど、容貌の異なるヨーロッパ人パードレに宿を貸すのは困るという日本人キリシタンが少なくなかった。1614年3月23日付、長崎発、スピノラのイエズス会総長宛て書翰(前掲)によると、日本人キリシタンがそうしたがるのは、日本人パードレのほうが匿いやすいからだという。しかし、だからといってスピノラは、日本人パードレの利便性に着目しようとは絶対に考えない。スピノラは、「当長崎で司教の仕事を手伝うために少数の日本人司祭は必要であるが、それ以外には、イエズス会司祭であれ、教区司祭であれ、日本人司祭が大勢いてはならない」と主張する。そして日本人聖職者は「必ず結束し、彼らが大量になると、自分たちが上長になり、自分たちのやり方で管理することを望むようになるに違いないからである」と指摘する。

しかしともかく、日本教会を取り巻く外部環境は厳しさを増す一方であった。そのことが逆に、イエズス会本部の否定的考えにもかかわらず、その後も日本人司祭が生み出される要因となったようだ。潜伏することがより容易な日本人パードレの必要性がより増したためであろう、江戸幕府の厳しい禁教政策に対応するため、日本イエズス会は、本部の指令とは逆行する形で、禁教令が全国に及んだ1610年代半ば以後、必修の学問を満足に修得していない日本人イルマンを幾人かパードレに叙階し、日本における教会活動に投入してゆく。

その一例として、天正遣欧使節の一員としてローマへ赴いた中浦ジュリアンがいる。中浦は1601年にマカオに渡航し、おそらくは1604年に帰国、1608年に司祭に叙階された。

イルマンがパードレへ昇格するためにはラテン語・倫理神学・哲学課程・教理神学の講座を段階的に受講してゆかねばならない。しかし、逼迫する日本キリシタン教界の実情は日本人イルマンにそのような長期間の学習を許さなかった。

無論、このように拙速にして緊急避難的な日本人司祭の養成・叙階は、ヴァリニャーノが主唱した *Acomodatio* 「適応主義」の理念の実現とは何の関わりもない。

さらにマカオ・コレジオにおける厳しい学習になかなかついてゆけない日本人イルマンの苦悩を窺わせる記述が見える。ニコラオ・ダ・コスタによると、マカオにやってくる日本人イルマンは「気ままに養育されている」ため、秩序の厳しいコレジオに入学すると、「憂鬱症」(*malenconia*)に罹ってしまうという。コスタはさらにこう記述する。「私は彼らの内のひとりに尋ねた。私を友だちと思って、陰鬱になる理由は何なのか言って欲しい、と。しつこく頼んだ末に、彼は私に次の言葉を言った。*Spectaculum factismus* 我らは見せ物にされた、と」(1612年2月26日付け、日本発、イエズス会総長補佐アントニオ・マスカレーニャス宛て書翰)。

パードレとなるために必修の学問を完璧に修めてはいなくとも、キリストの証人となることは可能である——。

このことを中浦は一命を賭して証明してみせた。1632 年末に北九州小倉で捕縛された中浦は、1633 年 10 月 18 日の長崎西坂の丘の処刑場へ連行され、「穴吊るし」の拷問を受け、10 月 21 日に殉教。中浦と一緒に穴に吊るされたポルトガル人司祭クリストヴァン・フェレイラは、即日この拷問に屈服、以後、澤野忠庵と改名させられ、幕府目明しとして禁教政策に荷担する道を選ぶことを余儀なくされる。

日本人イルマンに対するヨーロッパ人イエズス会士の冷ややかで差別的な雰囲気が決定的となる状況のもと、イエズス会に頼らず自力で教区司祭になる道を志す日本人が現われても不思議ではあるまい。

ここに荒木トマスという日本人が登場する。荒木は、イエズス会の教育機関に入ることを、おそらくは出自の賤しさを理由に拒絶された。その後、彼は単身ローマへ赴き、優れたラテン語の力を身につけてベラルミーノ枢機卿の寵愛を受け、やがて司祭に叙階される。荒木は 1614 年 8 月マカオに着き、そこに滞在後、禁教下の日本に帰国するが、やがて棄教して迫害者の手先となる。荒木は、帰国途上のマカオにおいて、イエズス会パードレになる希望をほぼ絶たれていた日本人同宿に対し、イエズス会を去りインド、またはヨーロッパへ行きそこで教区司祭になる道を選ぶよう説得したという。

マカオ滞在中、荒木はまた、日本人イエズス会イルマンに対し次のように語ったという。曰く、「私(すなわち荒木トマス)はマドリッドにいた時、日本征服を企てるよう托鉢修道士たちが国王に働きかけたこと、それにイエズス会パードレたちがその企てに抵抗したことを知った」と(1620 年 3 月 20 日付け、長崎発、マテウス・デ・コウロスのイエズス会総長宛て書翰)。ここに記述されている「抵抗」とは、日本教会がイスパニアの指揮下に入ることを快く思わぬポルトガル系イエズス会宣教師たちの「抵抗」であって、彼らが武力による日本征服の野望を持たなかったことを意味するわけでは、決してない。

荒木はヨーロッパ・カトリック世界とその植民地の実態をつぶさに見聞することにより、イスパニア系托鉢修道会であれ、ポルトガル系イエズス会であれ、植民地主義列強と結びついた修道会主導の布教事業のあり方に対し、日本人の立場から強い疑念を覚えたものと推測することができる。

日本イエズス会の上長たちは、荒木トマスの如く、修道会のコントロールを脱し日本人が主体的に知見を広めたり独自の行動をとったりすることを極端に嫌い、かつ怖れた。

フランシスコ・ヴィエイラは、マカオに滞在する日本人同宿のうちの数名がイエズス会の意思に背いてインドへ行ったこと、さらにそこからローマへ渡ることを望んでいることを、さも不快げに記述した後、明らかに荒木トマスを念頭に置きつつこう記す。在ローマのパードレたちは、「いかなる浮浪の徒(vagabundo)にも、容易に軽々しく恩恵を施さないようにして欲しい」と(1618 年 1 月 10 日付け、マカオ発、イエズス会総長補佐宛て書翰)。そして彼らが日本

へ帰国すれば「数々の憎悪すべきことを仕掛けてくる」であろうという懸念を示す。ヴィエイラのこの懸念は、荒木が帰国早々に棄教し禁教政策への協力者となったことでみごとの中する。

帰国後の荒木をイエズス会は、当然のように、裏切り者の「ユダ」呼ばわりする。ただし棄教後の荒木の真意に関しては、次のような消息があることも附記しておかねばならない。荒木は、長崎代官村山当安の家でこう語ったという。曰く、「キリストの法は真実であるとしても、これを日本で広めようとするパードレたちの意図は、日本を自分たちの国王に従わせようというものである」(1621年3月15日付、日本発、マテウス・デ・コウロスの総長宛て書翰)。

以上明らかにしてきたように、宣教師の「生の声」を伝える教会未刊史料を通じ、私ども日本人研究者はヨーロッパ人研究者に先駆けて、キリシタン教会の驚嘆すべき赤裸々な実像を知ることができるようになった。これはひとえに、キリシタン史家高瀬弘一郎(慶應義塾大学名誉教授)の文字どおり前人未到の業績の賜物にほかならない。

禁教下にあらゆる危難を克服し英雄的に布教活動に邁進する、という宣教師の表面的イメージとはまるで裏腹の、イエズス会幹部パードレの目に余る行状の幾つかを読んでみる。

日本準管区長フランチェスコ・パシオの後継者として初代日本管区長となったヴァレンティン・カルヴァーリョは、1614年の禁教令発布当時、日本イエズス会の最高責任者の地位にあった。彼は、全国的な禁教令が発せられると、1614年たちまちマカオへ遁走するが、その前後の所業について、日本に残留したマテウス・デ・コウロスは、次のように記す。

「管区長ヴァレンティン・カルヴァーリョは、当管区のプロクラドール(=財務担当パードレ)の手に1000クルザードの彼自身の資産を預けている。彼はそのかねを貸し付けることによって利殖を図った。そしてこのかねを望みのまま消費し、それを大きな楽しみとしている。〔中略〕さらに彼は、当日本国内の世俗の人々の家に、多くの保存食品、ポルトガルの葡萄酒、フランドルのチーズ、その他の物が詰まった食品戸棚を預けている。これについて、当管区のプロクラドール、パードレ・カルロ・スピノラは、もしもそれを売れば200クルザードに上るであろう、と私に語った。管区長カルヴァーリョがこれを預けている以上、プロクラドールも、管区長代理も、それを動かす権限を持たない」(1616年2月15日付け、諫早発、イエズス会総長宛て書翰)

さらにコウロスは、「娯楽と音楽を余りにも愛好する」管区長カルヴァーリョの性癖に非難を浴びせる。曰く、「同パードレは、日本において、しばしば夜の10時に、すでに床に就いていながら、ひとりのイルマンを自分の寝室に呼び寄せ、ヴィオラを弾かせ、それに合わせて眠りを誘う歌を裏声で歌わせた」と(同上)。

カトリックの「七大罪」には「貪食」という一項が含まれる。それを想起させるような巡察師フランシスコ・ヴィエイラの行状をマテウス・デ・コウロスは告発する。ヴィエイラと言えば、弛緩した日本イエズス会の風紀引き締めを期

待されて来日した人物であったのだが。

「人々はこの老人について安楽を好む人物だと認めている。食生活においてそれが甚だしい。〔中略〕パードレ・カルロ・スピノラが逮捕された次の夜、当長崎市から急いで退出した時でさえ、彼は船で肥後の島々を巡り、そこから^{たかく}高来^{カミ}の地に行った。そして上〔京都・大坂〕から戻って以後、今日まで高来に滞在している。彼は常にそこから当地へ目録を送って、自分が食べる物を注文してきたし、今もそうである。それは雛鳥と鶏である。牛肉については、彼は牛の腰肉(lombo)しか食べないのだが、これもまた注文してくる。彼に仕えている日本人従僕たちまでもが、彼は食事のたびに鶏を一羽食べると、同胞に語っている。そしてそれは本当である。アーモンドはマカオ経由でオルムスから来るもの以外にはないので、当地では非常に高価であるにもかかわらず、彼は manjar real〔鶏・小麦粉・アーモンドで作った食物〕を注文する。さらに彼は、自分が好むある種の保存食品(conservas)、焼きたてのパン(pão fresco)、捻りパン(rosca)、および大好物の果物を注文する。梨の時期には、梨の芯に穴を空け、そこに砂糖を詰めて竈で焼いたものを彼のデザートに供する。ゆで卵も彼は常に砂糖をつけて食べる」(前出、1619年9月25日付け書翰)

日本キリシタン教会が江戸幕府の残虐にして狡猾な禁教政策によってのみ滅んだとする見解があるとすれば、それはおそらく正確なものではあるまい。キリシタン迫害のもと、日本人との協働を真剣に模索する道を放棄したばかりでなく、みずから底なしの腐敗・頹廢に陥って、日本布教に対する真摯な熱意を喪失してしまったイエズス会は、一面において“自壊”の道を選択したと評するほかないと思う。

中国語訳

欧洲传教士对于培养日本圣职人员的看法
以及耶稣会士的真实形象

日埜 博司

耶稣会巡视员范礼安（Alessandro Valignano）神父是在日本基督教史上留下传大足迹的意大利传教士。范礼安曾三度抵日，但从制定传教策略的角度看，始于 1579 年的首次日本巡视具有最重要的意义。范礼安的传教策略被称作“适应主义”（Acomodatio）。他主张在外在形式与礼仪（external manners and etiquette）上，最大限度地顺应日本习俗，以避免引发与日本人的心理磨擦。在耶稣会同事的要求下，范礼安对日本人的适应能力极为信赖，并决定通过教育，逐步将他们提拔为神父（Padre）与修士（Irmão）。

本稿将简单讨论耶稣会内部能否将日本人培养成圣职人员的相关争议，并考察范礼安确定的上述议案为何遭受挫折，进而论证基督教未能在日本扎根的原因之一，是欧洲传教士与日本基督徒之间信赖关系的崩溃。

关于是否培养日本圣职人员，最早见于耶稣会总会长默丘里奥（Everard Mercurian）1578 年 12 月 4 日写给范礼安的信件，总会长在信中指示他让日本人入会，并积极地将他们培养为传教士。^①受此鼓舞，范礼安排除了日本布教长卡布拉尔（Francisco Cabral）的强烈反对，分别在丰后府内（大分）建立神学院（Colégio），在肥前有马和近江安土设立小神学校（Seminário），在丰后臼杵设立修练院（Noviciado），开始着手对于日本人的教理教育。

然而，反对培养日本圣职人员者并非卡布拉尔一人，墨西拿（Lorenzo Mexia）神

^① Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap.Sin.3, f.2v.

«Quanto al trato de los nuestros de Iapon e ocurre dizir a V. R. que aunque en las respuestas de la congregacion se determino que del todo se quitasse, todavia vistas las razones que el Padre Francisco Cabral escribe en su carta a V. R. me parece que pueda suspender la execucion hasta otro aviso nuestro que daremos luego que ternemos informacion de V. R. acerca de lo que iuzga dever se hazer en el dicho negocio, y porque de las informaciones que de alla venieron, entendemos que los Iapones tienen qualidades accomodadas a nuestro instituto y a la necessidad de aquella tierra, podra V. R. comunicar con la moderacion que le pareciere facultad al Viceprovincial de Iapon para los poder recibir en la Compañia procurando que sean bien criados en el Noviciado para que despues puedan servir para la conversion de aquella gentilidad.»

父在 1579 年于口之津写给耶稣会总会长的信中声称：日本基督徒人数众多，但他们只是接受洗礼而已。我不知道有多少人拥有真正的信仰，许多人是出于对每年来此的葡萄牙商船感兴趣而成为信徒的，巡视员范礼安决意在日本创建小神学校，并希望将日本人叙阶为神父。我对此计划颇多疑虑。^①墨西拿神父在 1584 年 12 月 8 日于澳门写给耶稣会总会长的信中说：日本修士通常有二心，一心对外，一心向内，后者不易为他人窥见，如果让日本人随便入会，或许会遗祸未来。^②

时至今日，葡萄牙基督教史研究者已不再认为，包括大名在内的日本基督徒，其改宗或是基于物质需求，或是对神学奥义知之甚少。这一观点不仅被葡萄牙学者所接受，而且成为固执于天主教中心史观的基督教学者的普遍看法。在所谓的“基督教世纪”中，日本基督徒信仰的模范程度，在公开出版，并被广泛阅读的弗洛伊斯（Luís Fróis）的《日本史》以及《耶稣会士日本书信集》中俯拾皆是，成为建立天主教史观的研究者所依据

^① Jap.Sin.8-I, ff.248v., 249.

«Quanto a la cristiandad, como alla no se scrive sino lo bueno, pensava yo con nosotros que era una primitiva yglesia, y que podria venire acaá obispo, y aver yglesias cathedrales, y que se podrian ordenar muchos naturales, y cosas semejantes, mas ahora veo claramente que nada desto es possible daqui a buenos años, porque los cristianos, como tienen tan malo natural, y tan mala educacion de niños, no se muda luego que son cristianos, sino mui devagar, y por eso son mui frios en la fee, y muchos la dexan bolviendo a adorar sus pagodas y idolos, y contanse muchos millares de cristianos, porque se baptizaron, mas no se quantos tienen la fee, tambien viene esto de no aver tantos padres y hermanos, que custen para cultivar y conservar esta nueva viña. Por donde parece, que no se deve de dilatar la cristiandad daqui hasta algunos años, en quanto no se fundan bien los cristianos, que son hechos, sino si se pidiese con mucha instancia y con buen spiritu, porque los que hasta ahora son hechos, siempre fue con respecto a la nave de Portugueses que aqui viene cada año, porque pretenden la ganancia, que della les puede venir, y ansi algunos señores y tonos piden la fee para sus tierras a trueco de la curofune [黒船], que ansi llaman la nave pensando que esto es contrato y modo de mercaderia, que hazemos con ellos, y no es pequeño trabajo el que tienen los padres con todos estos cristianos y gentiles en les enbiar pieças de seda y otras cosas de precio, a los unos porque no buelvan atras, y a los otros para que sean nuestros amigos.

El padre Visitador esta mui assentado en hazer algunos seminarios de niños Japones, para que criandose en virtud e doctrina a nuestro modo, puedan ser por tiempo buenos cristianos y ordenarse y ser curas, lo que puede ser, siuviere quien favoresca este buen intento, porque caa los Reies y señores son mui pobres, y antes ellos de nos esperan, que nos dellos. Los niños son ingeniosos y de buena indole, y tomaran facilmente los que se les enseñaren, los quales en grandes son tan malos, como tengo dicho porque en pequeños no los castigan sus padres y madres, aunque merescan castigo, porque tienen por crueldad dar en los inocentes, y hazerlos llorar, por lo qual los niños hazen algun mal, tomanlos a parte como a viejos ancianos y ansi los amonestan que no hagan mas aquello, y pecados ha que no solo no los castigan las madres, mas mandanle que los hagan, y esta creo que es la principal causa desta gente universalmente ser tan mala, tan sanguinaria, y tan abominable.»

^② Jap.Sin.9-II, f.322v.

«5.º porque los Japones hermanos son ya mas que los hermanos de Europa, y como son naturalmente fingidos y dissimulados, porque lo tienen por honra, id est tener un hombre dos coraçones uno para fuera, y otro para dentro que no lo sepa nadie, y lo contrario tienen por boberia, puedese temer que adelante brote y nasca alguna mala semilla, sino se recibiere con mucha eleccion y probacion.»

的基本史料。然而，在并不公开的机密书信中，耶稣会神父则豪不隐瞒上述“教化性”史料决不会记载的“事实真相”。现例举如下两则令人不快的文本记录：

斯皮诺拉（Carlo Spinola）神父曾在 1615 年 3 月 25 日于长崎写给总会长的信中，提及耶稣会主要干部为向日本人送礼所花费的大量金钱及其弊端。他随后说道：“我根据经验判断，许多人成为基督徒，向我们靠拢，邀请我们去其领地，是为了必要时从我方得到支持，向我们借钱，在南蛮抵达时，通过我们购买生丝和新型纺织品。”^①克鲁士（Pedro de la Cruz）亦在 1599 年 2 月 25 日于长崎写给耶稣会总会长的信中宣称：“改宗程度极低”的基督徒“一旦面临困难，决不会公开承认受洗以及基督徒的身份。这决不是什么秘密，而是人们不愿意承认的事实。”^②

由于范礼安的提议，耶稣会终于在 1594 年创建了澳门神学院。创建该神学院的初始目的是为了向日本及中国传教培养传教士，但其创建初期亦反映出对日本传教士事业抱有极高热情的范礼安的个人意志，可以说，该机构的主要机能是负责日本的传教事业。范礼安在 1593 年 11 月 12 日于澳门写给耶稣会总会长的信中说，“该神学院纯粹是为了日本耶稣会和基督教会的利益，是为了给日本修道士以良好教育。”他还宣称，由于其财政来源主要来自于日本耶稣会的经费，所以它必须处于日本耶稣会的全面“指挥之下，并必须从属于它。”^③

正如该神学院的存在理由“是为了给日本修道士以良好教育”，范礼安在 1593 年 1 月 1 日于澳门写给耶稣会总会长的信中，对日本人进入澳门神学院接受教育的必要理由作了详细说明。^④其中至关重要者有以下两点：

一，日本人“为能优雅地说话，书写和阅读而热衷于他们的假名与汉字的学习”，“他们对自身习俗与外在礼仪非常固执”。因此，为了掌握作为基督徒的“坚定操守”，并精通欧洲的学问，必须让日本人前往澳门，在一定时期内专注于欧洲及天主教世界的知识学习。

^① Jap.Sin.36, ff.168-168v. 高濂弘一郎译《耶稣会与日本》岩波书店，1981，大航海时代丛书第 1 期第 6 卷，第 411—418 页。

^② Jap.Sin.13-II, ff.269-277. 《耶稣会与日本》第 199—252 页。

^③ Jap.Sin.12-I, ff.114-116. 高濂弘一郎译：《关于建立澳门神学院的不同见解》，《基督教时代的文化诸相》，东京，八木书店，第 2 部第 3 章，第 223—234 页。

^④ Jap.Sin.12-I, ff.40-41v. 高濂弘一郎译：《关于建立澳门神学院的不同见解》，《基督教时代的文化诸相》，第 2 部第 3 章，第 206—215 页。

二，在生活习惯与行为方式上，日本人与欧洲人天差地别，因此，必须在教会内部，努力让日本人适应欧洲人。如果欧洲耶稣会士前往日本，没有日本人的协助亦将一事无成，所以为了让日本人“在葡萄牙人中间生活，在实际需要中学会我们的语言与习俗，就必须要让他们暂时离开日本。”如果今后每年将若干名日本修道士送往澳门，借以时日，让所有人都在澳门接受教育，他们就会“以全新的面貌重返日本。”

有关澳门神学院创建之后的情况，详见巡视员范礼安制定的学规与内规（制定于1579年10月）等相关史料，^①我们可据此获悉澳门神学院日常教育活动的具体情况。基督教史学者高濂弘一郎已将这一重要史料译为日文，并作了详尽讨论。现将范礼安相关指令的章节标题摘录如下：

第一章，有关整个学习过程的若干基本事项；

第二章，授课与休息日；

第三章，拉丁文班级；

第四章，教养科目课程；

第五章，伦理学科；

第六章，教理神学。

对我们来说，最令人感兴趣的文献是范礼安亲手制定的神学院院长（Reitor）规则。^②范礼安在文本卷首，就申明该神学院是“日本的机构之一”，并强调创建它的首要目的，是“向为在日本生活而来自印度，并即将前往日本的修道士们”施以“良好教育”，以“帮助日本耶稣会与基督教会”。虽然范礼安此文亦提及中国传教事业，但对他来说，其重要性始终在日本之下。

范礼安还对澳门神学院的存在理由作了如下说明：“在该神学院中，我们的欧洲修士必须与日本修士一起接受教育。由于日本人的习俗与行为与差异极在，为很好的引导日本人，必须给以特别忠告。”由下文摘引的条文可知，范礼安为在澳门学习的日本修士考虑得极为周到。例如：

一，由于日本人对缺乏清洁极为厌恶，故必须用心保持食堂，厨房以及整个住院

^① Arquivo Histórico Ultramarino, Códice 1659, ff.277-283v. 高濂弘一郎：《关于澳门神学院的教育内容与院长的职权》，《基督教时代的文化诸相》，第2部第4章，第249—263页。

^② Jap.Sin.14-II, ff.230a-230dv. 高濂弘一郎：《关于澳门神学院的教育内容与院长的职权》，《基督教时代的文化诸相》，第2部第4章，第264—274页。

(Casa) 的清洁。

二, 为保持健康和清洁, 日本人自幼便有经常洗涤身体的习惯。住院内应建造日本式的澡堂, 并为日本修士煮有热水, 让他们能够每月入浴 1 至 2 次。

三, 日本人希望用饮茶保持健康。神学院应始终备有日本风格的茶汤 (chanoyu)。

四, 日本人的饮食不象欧洲人那样味道浓烈, 但食用作为营养来原的大蒜, 故不可忽略此物的预备。

五, 日本人很容易习惯“咖喱味鸡肉”, 可频繁供给。

六, 为让日本修士掌握葡萄牙语, 滞留澳门期间, 每天应用 30 分钟进行葡萄牙语的教授与学习。尤其要使其理解“名词前置的冠词差异, 动词时态的多样性, 词性的区别, 名词单数和复数的不同。”日语完全没有这种语法体系, 所以教授不周, 日本人说话时会出现基本错误。

范礼安还就欧洲圣俗两界与日本人的交际, 向欧洲人提出以下忠告:

一, 今后前往日本赴任的欧洲人, 应努力在澳门神学院习惯日本式的清淡饮食。日本人通常不吃兽肉, 以鱼为主食, 所以欧洲人应习惯每周食鱼数次。

二, 日本人天生多愁善感, 如果批评时用词严厉, 他们会感到非常悲伤。这样做会使日本人离心离德。在批评日本人时, 要说明理由, 用温和的语言告诉他们哪里做得不对。

三, 预定前往日本的欧洲人, 在澳门待机出发期间, 须向接受委托的老师学习日语, 以便在赴任日本时熟练地运用日语。

培养日本圣职人员, 以及为此目的创建并经营澳门神学院, 是范礼安孤注一掷的夙愿之一。

范礼安 1606 年 1 月 20 日死于澳门神学院, 在去世的三天前, 即 1606 年 1 月 17 日, 他写下了备忘录。^①此文实际上是范礼安的临终遗言。范礼安在文中这样嘱咐准管区长神父: “应竭尽全力, 将尽可能多的日本修士送往该神学院。他们应在此滞留 4 到 5 年, 让学习德操与学问。”他还叮咛道, 即使某些神父和修道士反对我的遗愿, 准管区长神父亦不得随声附合。由此可见, 直到停止呼吸的最后时刻, 范礼安还在为澳门神学院的顺利运转, 日本修士在此的教理教育, 以及将他们叙阶为神父而操心, 他始终对

^① Jap.Sin.14-II, ff.229-230. 高濂弘一郎:《巡视员范礼安之死与澳门神学院的院长及管区代表》,《基督教时代的文化诸相》,第2部第6章,第311—320页。

自己的设想充满热情。

然而，就像他积极培养日本圣职人员的主张一样，从范礼安提议创建澳门神学院一开始，就有许多人表示反对。就此而言，范礼安似乎陷入孤立无援的境地。

在前引 1593 年 11 月 12 日于澳门写给耶稣会总会长的信中，范礼安再三阐明创设澳门神学院的必要性。不仅如此，他还向自己的顾问弗洛伊斯神父，孟三德（Duarte de Sande）神父以及墨西拿神父说明了自己的考虑，并要求他们将各自意见自由地写信送交耶稣会总会长。但对范礼安来说，最不幸的是，这三位顾问都对澳门神学院的创建以及日本圣职人员的培养持否定态度。

有一份文献名为《召开于果阿的神父协议会（junta）上，不应在澳门创建耶稣会神学院的各种理由》，^①虽然此文的写作时间与执笔者无从稽考，但它显然反映了与范礼安不共戴天的死敌，在传教策略上与之针锋相对的卡布拉尔神父（1592 至 1596 年任耶稣会东印度管区长）的意见。该文例举了众多反对者的理由。

一，日本人有拉帮结派的癖好。日本宗教最初是单一的，但现在分裂为各种各样的宗派。我们担心将日本教会交给日本人后，神（Deus）的律法也会发生相同的分裂，产生众多异端。日本不存在强制尊奉基督教的绝对权力，所以分裂一旦发生，我们将无法纠正。所以，向日本人作基督教教理的教授是危险的，接纳日本人入会或叙阶为神父，应绝对避免。

二，范礼安声称，将日本人带到澳门并教化之，是为了让他们与欧洲人协调融洽。但对日本人做如此期待是不现实的。神父们在日本追求的，并非海市蜃楼，亦非生活食粮，他们只想拯救日本人，但日本人无法理解这一点。何况将日本人带到澳门这一圣俗两界均劣迹斑斑地方的行为本身，亦是非教化的极致。

三，中国人对日本人极其憎恨，他们讨厌日本人，视之如仇敌和盗贼。况且现在日本人正在进行对中国人的不义战争（文禄庆长之役，即壬辰倭乱），在中国人的土地（即澳门）上为日本人建造神学院，中国人绝对不会接受。疑心病很重的中国人或许会猜测，葡萄牙人一定受到日本国王或领主的唆使，以澳门神学院为基地，与日本人同流合污，一旦时机成熟，很可能会一起造反。

^① Archivum Romanum Societatis Iesu, Jap.Sin.23, ff.285-291. 高瀬弘一郎译：《关于建立澳门神学院的不同见解》，《基督教时代的文化诸相》，第 165—175 页。

上述第二条反对意见，当然会使我们联想到卡布拉尔在1596年12月10日于果阿致信耶稣会总会长助理阿尔瓦雷斯的一段话。除了任用日本圣职人员一事，卡布拉尔还批评范礼安为培养日本圣职人员于1594年在澳门建立神学院。他说：如果日本人被带到像澳门这样“无序，吵闹，骚动，争议，暴动和淫荡”的街市，会把他们看到的一切转告同胞，他们会看到“葡萄牙人在肉欲和贪婪中杂乱无章，以及人们对神父举止不恭”种种实情。卡布拉尔还在信中提到日本人对于神父的这一指责：“神父们宣传两种律法，一种是对葡萄牙人说的，此法允许他们犯上述所有罪恶；另一种是对日本人说的，更为严格的律法，他们不允许日本人干葡萄牙人干的那些事。”^①

巴范济（Francesco Pasio）在1596年1月30日于长崎写给耶稣会总会长的信中，也提到了日本人叙阶为神父，以及耶稣会为日本人在澳门设立神学院的是是非非。尤其值得关注的是，巴范济此信兼收并蓄，他不仅提到了以卡布拉尔为首的神学院设立反对论，而且还记录了范礼安的反驳意见。^②

关于日本人能否胜任神父之职，巴范济的看法与卡布拉尔并无本质差异。总而言之，他亦认为日本人在信仰层面上尚属浅薄，尤其在禁欲，贞洁方面，触犯誓言的危险性很大。除此之外，巴范济还依据切身“体验”，对以下可能表示特别的担忧：如果日本人被叙阶为神父，他们必定会对身为同宿（负责教堂杂务，充当布道及翻译助手的非耶稣会士）时所喜爱的工作心生厌恶。他告诫说：“我对他们担任欧洲神父的翻译”，与基督徒和异教徒大人们“进行种种交涉，是否还克尽职守极为担心。”

关于叙阶日本神父之事，巴范济的见解与卡布拉尔的断然拒绝还是有着明显区别。他主张作为耶稣会神父候选人而被接纳的日本人，应限于少数最优秀的修士。大多数日本修士不应被接纳入会，而是作为教区神父（Clérigos，在俗神父），负责某一 *Residência*（远离传教据点的较小住院），而欧籍神父则应居住在 *Casa Reitoral*（处于传教中枢位置的主要修道院）中。

关于严格选拔日本修士最优秀者晋升为耶稣会神父的方案，巴范济亦似乎并不打算真的付诸实施。他一方面认为：即使在修练期结束之后，他们亦必须在 *Residência* 服务至40岁，然后才可被叙阶为神父；但同时又说，叙阶“与其说是相信其胜任神父之职，

^① Archivum Romanum Societatis Iesu, Goa 32, ff.585-588. 《耶稣会与日本》，第168—193页。

^② Jap.Sin.12-II, ff.351-353v. 《关于建立澳门神学院的不同见解》，《基督教时代的文化诸相》，第185—198页。

还不说是对他们以往辛苦的报答，并鼓励其他人，让他们心悦诚服地努力为教会服务。”他还断言：“只有在这一年龄被叙阶为神父，或以此为证，才能够证明他们在贞洁与傲慢等方面上不再那么危险了。”

由此可见，巴范济此信表明他十分清楚日本传教不能缺少日本人的协助，但另一方面，他又认为日本人最多只能作为欧洲圣职人员的助手。

类似态度中最为露骨的表白，见于斯皮诺拉 1617 年 3 月 15 日于长崎写给耶稣会总会长助理的信件。斯皮诺拉工作勤勉而不辞辛劳，颇受信仰虔诚的同宿的赞赏，但他却在信中声称，因为同宿并非耶稣会士，所以他们犯了过错，不会使耶稣会的名誉受损。斯皮诺拉对日本人的看法极为糟糕，他认为耶稣可以接受这样的助手，并以“日本人的国民性中缺少谦虚与顺从的精神”，将他们中的若干人培养成修士，但一旦“这些黑鬼”被晋升为神父，并开始学习拉丁语，他们就会目中无人，对我们无所帮助。斯皮诺拉此信还提到对日本人寄以很大期望，并试图将他们培养为圣职人员的范礼安，声称“后来，他在临死前改变看法，对自己以往的所作所为非常后悔。”^①在 1614 年 3 月 23 日于长崎写给耶稣会总会长的信中，狡猾的斯皮诺拉无所顾忌地道出了他的心声。他参认与其说是耶稣会修士，还不如说非耶稣会士“的同宿对于灵魂的热情更让人吃惊。”他一方面对这些同宿的虔诚信仰和谦逊的忘我的工作热情大为赞赏，但同时又说，在财政状态严峻的当下，同宿可以被“放弃”。^②

正如斯皮诺拉无意中写下“黑鬼”一词所象征的那样，它表明南蛮传教士对于日本人的蔑视根深蒂固。在科罗斯（Matheus de Couros）1619 年 9 月 25 日于长崎写给耶稣会总会长助理的信中，我们可以看到他对同胞巡视员维埃拉（Francisco Vieira）的非议。科罗斯说：他非常担心懂得葡萄牙语单词的日本仆人是否会注意到维埃拉侮辱日本人的言论，并感慨道，像维埃拉这样的人，还是不要在传教盛期来到日本，因为“他对当地的习俗，礼仪和饮食，全都看不惯。他有时称日本人是畜生（bruto），有时称他们是黑鬼（negro），有时还叫他们是野蛮人（barbaro）。 ”^③

范礼安曾派遣日本少年使节前往谒见罗马教皇，在松田毅一专论此事的名著《天正遣欧使节》（东京，讲谈社，1988 年）中，我们可看到如此评论：在对基督徒的镇压中，

^① Jap.Sin.36, ff.187-187v. 《耶稣会与日本》，第 462—468 页。

^② Jap.Sin.36, ff.165-165v. 《耶稣会与日本》，第 388—395 页。

^③ Jap.Sin.35, ff.129-131v. 《耶稣会与日本》，第 498—507 页。

“日本修士在南蛮人占多数的修会中向他们日本国情，为他们启蒙，并因而对耶稣会做出巨大贡献。”在所谓“八宗九宗”这样对宗教颇为宽容的日本社会中，为何“基督教会遭受迫害？其原因应当会传到欧洲人耳朵里。”这里所说的“应当会传到欧洲人耳朵里”，或许包含着“实际上并非如此”的言外之意。考虑到上述日本耶稣会内部因人种差别而弥漫的冷漠氛围，松田希望日本修士向欧洲上长自由表达意见的可能性，是微乎其微的。

就本文的主题而言，我们还想谈变巴范济在前引书信中所表达的顾虑，他尤其担心日本人会触犯禁欲，贞洁的誓言。

许多欧洲耶稣会士亦有着与巴范济相同的顾虑。波洛（Giovanni Battista Porro）神父曾在1611年9月20日于日本写给耶稣会总会长的信中，提到以不干斋・巴鼻庵（Fucan Fabião）为首的几个日本修士，在与“比丘尼”（bicunins）同居后脱离了耶稣会，给耶稣会的名誉带来极大损害。^①

不干斋・巴鼻庵是日本耶稣会中为数不多的知识分子，他不仅在基督教全盛时期的1605年撰写了基督教护教书《妙贞问答》，还将日本古典《平家物语》改写成使用罗马字母的口语体，此书1592年刊行于天草后，被用作欧洲传教士学习日本语的教科书。

欧洲传教士认为，如果日本圣职人员能在贞操观念上有所追求，他们就必定成为纯洁无瑕的圣人。然而，他们自己的所作所为又是如何呢？作为耶稣会首屈一指的日本通，通辞罗德里格斯（João Rodrigues Tçuzu）离开日本一事的背后，就藏有他与长崎代官村

^① Jap.Sin.15-I, ff.38v-39.

«V. P. ja estara emformado da poca honra que fazem estes Irmãos Jappões a Companhia in oculis nem soo de toda a cristandade, senão de tantos frades: saindo tantos, e muitas vezes com tão ruim nome. A cousa de Fabião ja he velha; esta elle ainda apostata como primeiro em huma cidade que se chama Facata [博多], com a sua meretrix a ilharga, diante de todos os cristãos (porque em Facata ha cristandade numerosa, e casa grande nossa) João de Torres que tinha 10 annos de religião, ja desde o tempo de B. P. Torres: Cofan Lião: Cusa Andre; Simeão Lião e outros: e crea V. P. (o dizem os mesmos Jappões) que não tem ainda estes cabedal pera serem religiosos: e delles poco a poco se vão promovendo muitos ao sacerdotio. Universalmente os Padres sentem muito isto, e rezam a Deos que seja esta promoção pera sua gloria. Certo que melhor, ou pollo menos que bene, servem aos padres em catechisar os gentios, em pregar, em ajudar os cristãos os dojucus, como os Irmãos, com huma vantagem id est que se lhes acontece algum desastre e falta, não caie em discredito da Companhia como dos Irmãos, e depois que estou em Jappão nestes 7 annos não ha acontecido dojucus fazerem tais erros como alguns Irmãos id est ainda antes de fugirem da Companhia estarem amancebados com bicunins [比丘尼], como foi de Fabião: todos nos folgamos com ver que o Padre Visitador não vai continuando o noviciado: e os que entra [sic] na Companhia dos Irmãos quando entrão o tomão mais a punta de honra, que outro: e depois achandose apertados com votos e regras, recalcitrant em quanto são dojucus não estão tão apertados, e podem levar a carga melhor, de pregar, catechizar, e continuar.»

山当安夫人（教名朱斯特）关系暧昧的神秘内幕。迪亚斯（Manoel Dias）在 1615 年 12 月 6 日于澳门写给总会长的书信中透露说：日本耶稣会士中的两个人（一名神父，一名修士）因女性丑闻被送往澳门。他随后记述说：“在日本，这个问题造成了某些人的堕落。他们告诉我，四誓愿神父若阿·罗德里格斯也是如此。他们还这样对我说：罗德里格斯在长崎时，常常独自一人，不带随从，访问（地位）仅次于奉行的等安的妻子。其态度看上去极为狎褻，有时小便还与她一起前往厕所，并再三从衣服敞口处伸手摸她的乳房。她的丈夫通过侍女知道了此事。此后丈夫虐待了那个女人，还另外纳了妾。等安断绝了与该神父的朋友关系，将他逐出日本。但等安在驱逐他时列举了另外的理由。”^①

梅斯基塔（Diogo de Mesquita）神父在 1605 年 3 月 9 日于长崎写给耶稣会总会长的信件中，亦提到有关女性的风纪沦丧。他告诉总会长，耶稣会士在住院内外时常与日本女性“亲密交往”，举目不慎，为此，他希望会总长下令重振纲常。虽然此信声称“听取女性告解的方式均已得到改善”，但在提及“诸如用某些饮食或葡萄酒亲切招待她们”时，又声称“它已经成为习惯”，所以有人不想禁止它。梅斯基塔还意味深长的写道：“因为它不会带来肉体痛苦，而是给予它快乐。”^②

与此同时，在日本国内的神学院与小神学校，以及稍后的澳门神学院与神学校中，对于日本人的教育仍在继续。随着教育成果的获得，能否培养出日本圣职人员成为耶稣会士中广泛争议的话题。

范礼安虽然将撤消了反对自己设想的卡布拉尔的布教长职务，并热衷于日本圣职人员的培养，但他在 10 年第二次巡视日本之后撰写的 1592 年的报告中，亦大幅度修正了对日本人的评价，开始在这一问题上向后倒退。虽然他仍然对日本人经充分良好教育后成为圣职人员抱有期望，^③但欧洲耶稣会士中反对日本人叙阶为神父者越来越多。

例如，巴范济神父在 1597 年 3 月 3 日于长崎致耶稣会总会长的信中说，范礼安试图将日本修士逐一送往澳门神学院学习，然后将他们叙阶为神父，但所有在日本的神父都对此表示反对。^④再如前述耶稣会士中学识出众的通辞罗德里格斯，亦在 1598 年 2

^① Jap.Sin. 16-II, f.252v. 高濂弘一郎：《围绕长崎代官村山当安的事情》，《基督教时代对外关系研究》，东京，吉川弘文馆，1994，第 13 章，第 632 页。参见高濂弘一郎：《基督教传教士使用的暗号》，同上书，第 14 章。

^② Jap.Sin.36, ff.3-4v.《耶稣会与日本》第 292—301 页。

^③ Alejandro Valignano, *Adiciones del Sumario de Japón*, ed. José Luis Álvarez-Taladriz, Ōsaka, 1954, pp. 573-581. 参照井手胜美：《东印度巡视员 A·范礼安的日本人观》，《基督教研究》第 12 辑，第 403—413 页。

^④ Jap.Sin.13-I, f.59.

月 28 日于长崎写给耶稣会总会长的信中说, 根据他在日本的长期生活以及在神学校中教授日本人的亲身体验, 让日本人加入耶稣会应极为慎重。^①

另一方面, 在日本任上的第二位主教, 1598 年抵日的耶稣会士塞尔凯拉 (Luís de Cerqueira) 对此又持何种态度呢? 塞尔凯拉意识到培养日本神父的必要性, 他承继了以往耶稣会教育活动的成果, 在 1601 年初将两名日本人叙阶为神父。某些耶稣会士对新诞生的日本神父的贡献评价很高。梅斯基塔的意见代表他们的这一观点,^②但令人遗憾的是, 这些看法与日本耶稣会士中大多数人的意见相左。

正如前引波洛 1611 年 9 月 20 日信件所记载的那样, 随着传教形势的恶化, 日本耶稣会士丑闻不断, 脱会者亦络绎不绝。波洛在信中描述了以不干斋・巴鼻庵为首的若干日本修士的丑闻和脱会事件后, 主张不应让日本人加入耶稣会, 依旧让他们以同宿的身分为神父们服务为好。他还强调说, 如果这样, 即使他们犯错, 亦因有别于修士而不会

^① Jap.Sin.13-I, ff.132-132v. 土井忠生:《通辞罗德里格斯的日本书信》,《日葡交通》第 2 辑,东洋堂,1943,第 159—165 页。

«Anssi mismo por algun conoscimiento que tengo desta nacion, por me criar entre ellos desde niño propongo a Vuestra P. que me parece no convenir a nuestra a Compañía admittir a ella muchos hermanos Japones sin exacto examen y escoja, y con mucha consideracion, porque no tienen aquellas partes que los de Europa assi naturales, como en la efficacia de adquirir la virtud, y naturalmente es gente flaca y inconstante, allende que es ainda poco fundada en las cosas de nuestra santa fee, y rezien convertida que no sabe de raiz las cosas de la religion ni las entiende, y no sera bueno para nuestra Compañía cargarse de mucha gente imperfecta y quise vaya de la religion facilmente quando es instigada de la tentacion si que ella los pueda constrañer a nadie, por no tener braço secular de que se pueda ayudar contra los tales, como ya algunos lo han hecho andandose por tierras de Infieles sin podelles castigar como apostatas de la religion, y lo que es peor, que algunos destos han dexado la fee, como fue, Lino, Simon, Vomi Joan, Antonio, que no solamente la dexaron, mas sembravan erros, aun que les no deron credito, e algunos estan casados con hijos en tierras de Infieles, que es muy gran descredito de nuestra Compañía, que los que predicavan la lei de dios nuestro Señor esten desta manera, y muchos años hay que tengo este concepto, y me pare[ce] que realmente no se tiene perfecta cognicion desta nacion en lo que toca a las cosas de nuestra Compañía y con aver pasante de cento y tantos Japones en ella ninguna se de partes para gobierno ni penetrar mucho las cosas de la religion, ni gran zelo de las animas, ni mas poco mucho disposicion para las ordenes sacras por ahora; y es para arecelar, que despues queran ellos tener el gobierno, siendo los de Europa pocos, y ellos muchos y imperfectos; y recebidos quasi sin vocacion, porque la maior parte dellos se cria en los seminarios de niños y allí persuadidos de los que los crian, piden la compañía sin saber lo que hazen ni la importancia del estado que escogen, y contecio que una vez se recibieron treze juntos para el noviciado y de otra vez otros tantos juntos, otra vez seis, y se ve que entre ellos no ay hombre ninguno spiritual ni dato a la oracion, y ay mucho engano en ellos; porque naturalmente son muy modestos exteriormente y quietos en tal que captivan a los nuestros, y no pueden ser conocidos ni penetrados, es verdad que tambien en lo que toca a las pasiones no son tan vehementes como los de Europa como tambien ni tan eficazes para la virtud, ni en esto entiendo murmurar desta nacion, ni deshazer en ella mas solo dizir lo que siento ser bueno a nuestra Compañía, porque me crie entre ellos e en el seminario de Miaco y de Arima les he lido latin por algunos años.»

^② 梅斯基塔于 1607 年 11 月 3 日于长崎写给总会的信 (Jap.Sin.14-II, f.285)。Diego Pacheco, “Los Cuatro Legados de los Daimyos de Kyushu despues de regresar a Japón” in *Boletín de la Asociación Española de Orientalistas*, Año 9, Madrid, 1973, pp.39, 40. 参照佐久间正译:《返回日本的少年使节》,《长崎谈丛》第 56 辑,第 23—24 页。

对耶稣会的名誉产生不良影响。他的这一见解与前述斯皮诺拉 1617 年 3 月 15 日及 1614 年 3 月 23 日信件的看法可谓异曲同工。

相反，始终主张重用日本圣职人员的梅斯基塔在 1611 年 3 月 24 日于长崎写给耶稣会总会长的信中指出：若干日本修士的脱会，是因为长期学习拉丁语，等待晋升神父的机会，但最终希望破灭所致。在梅斯基塔看来，问题的产生恰恰是由于耶稣会对于日本人歧视。^①他还在 1613 年 3 月 10 日于长崎写给耶稣会总会长的信件中说，欧洲耶稣会士不能只任用本国会员，让日本人产生受歧视的感觉。^②梅斯基塔此言很容易让人联想起不干斋・巴鼻庵在脱会后撰写的《破提字子》一书中，指责南蛮人神父高傲自大，认为日本人不是人。他还回忆说，曾风闻今后日本人不得升为神父之命令云云。^③

据此度之，斯皮诺拉的热情呼吁无非是日本耶稣会士中极少数人意见。前引波洛 1611 年 9 月 20 日于日本写给耶稣会总会长的信中写道：“许多日本人会逐渐晋升圣职，神父们无不对此忧心忡忡。他们只能向神祈祷，但愿日本人的晋升有助于宏扬神的荣光。”日本管区长神父卡瓦略在 1614 年 11 月 30 日于澳门写给耶稣会总会长的信中亦报告说，日本神父与修士中的大部分人，在执行圣务能力这一点上，属“中等偏下。”^④

那么，在收到有关日本人会员评价的各种报告之后，罗马耶稣会本部又对此作何裁决呢？在 1611 年 1 月 1 日下达给日本准管区长的指令中，耶稣会总会长阿桂委瓦要求不得轻易将日本人晋升为神父。其曰：“鉴于巴鼻庵的脱会和其它若干同宿的经验，任命日本人为神父须慎重考虑，并注意不要因此使我们自己卷入其它麻烦之中。关于日本修士的待遇，一切均托附于您，以策万安。如未经充分考察，不能确保其德操的崇高，就不得晋升他们为神父。”^⑤在 1612 年 3 月 28 日给日本准管区长的指令中，总会长阿桂

^① Jap.Sin.36, ff.13-13v.

^② Jap.Sin.36, f.21v.

^③ 海老泽有道，切希里克，土井忠生等：《基督教书，排耶书》，东京，岩波书店，1970，第 443—444 页。

^④ Jap.Sin.16-II, f.106.

«Acerca dos Padres e Irmãos Japões he difficuloso julgar se sam colericos ou não. A verdade he que os Japões são ordinariamente colericos, porem sabem refrear a colera, especialmente os nossos Irmãos quando estam diante de pessoas, das quaes dependem, como são os superiores, e geralmente falando são melanconicos. No talento para os ministerios da Companhia não passam de mediocridade, e os mais delles ficam infra mediocritatem.»

^⑤ Jap.Sin.3, f.76v.

«Lembramos a V. R. com occasião da queda de Fabião, e do que a experiencia vai mostrando nos outros dojucus que julgamos ser necessario promover com muita consideração ao sacerdocio os Japões pera que nos não vejamos em algum trabalho com elles, e a V. R. encarregamos muito faça o mesmo com esses Irmãos não promovendo senão aquelles de que tiver tomada boa experiencia, e de cuja virtude se possa assegurar».

委瓦命令他重视日本修士接二连三的脱会与放逐，对他们加以严密监视，不能过于重用日本人。要让他们像好的 *Catequista*（传教士与同宿）那样工作，只能给予他们有关拉丁文学习所必须的知识。^①总会长阿桂委瓦在 1615 年 2 月 1 日给日本准管区长的指令中还说：“虽然不能完全排除他们，但与其说让日本人成为神父，或者加入耶稣会，还不如让他们作为同宿更有作用。所以还是不要让他学习拉丁文为妥。……在日本人加入耶稣会或者叙阶为神父时，须严格控制，行事应极为慎重。为此，管区长可在咨询了顾问，并对此事做出判断后，立即就此事报告本部。如情况特殊，无法及时报告，亦必须在日本就此事相互商量，将情况报告给我们。在受到我们的回答前，日本人加入耶稣会或叙阶为神父将不被承认。”^②

^① Jap.Sin.3, ff.76v-77. «Nesta diremos o que pertence a criação desses dojucus e Irmãos Japões primeiramente não julgamos expediente que no seminario se recebam minions mas que os que entrão nelle seja ordinariamente dos que tem dado alguma pouca de sua bondade e talento nas residencias, ou missões acompanhando os Padres.

Item que se não gaste tanto tempo em lhes ensinar latim, mas bastará que saibão somente quanto lhes he necessario pera entenderem os livros ecclesiasticos, e se servirem delles, finalmente se procure de os fazer bons catequistas, não os metendo noutros estudos que a este fim não são necessarios com o que se conservarão mais humildes, e servirão melhor, e se forrão despesas: assi mesmo que o seminario se reduza a menor numero acomodado as necessidades e a per toda provincia. E por ora não parecia que se devesse escusar ao menos a pintura e charamelas.

Dos que acabado o tempo do seminario tiverem provado bem nas christandades se podrão somente receber alguns, mas sejião mui raros, e escolhidos. Vemos ser parecer de muitos que deviamos reservar a nos esta licença, não nos pareceo fazelo, mas metemola ao Visitador, ou quando o não aver ao Padre Provincial que sopomos sera sempre pessoa de quem poderemos confiar semelhantes cousas, e que o fara com toda a exacção, e eleição que convem, não se deixando levar de intercessões. Por ora nos parece que convem apertar muito mais a mão polo muito numero que ha de Irmãos Japões, e a experiencia ir mostrando que não saem, como esperavamos, e assi não convir receber senão raros, e mui bem provados primeiro, e feitas todas as mais diligencias que a Vs. Rs. la parecerão que nos vistas as informações que de la vem; não fechamos a porta pola cousa ser odiosa a essa nação, de que todavia com o tempo podera esperar algum bem.»

^② Jap.Sin.3, f.77v-78.

«Não pretendemos com acima dito que V. R. aja de afrouxar em fazer conservar a disciplina, antes o exortamos a continuar, sabendo a necessidade que ha nessa Provincia de reformar, e acomodar muitas larguesas que nella se forão introduzindo, como de estarem nossas casas tam devaças a pessoas de fora, o que nos dizem he ocasionado a quebras de momento o andarem esses Irmãos Japões ordinariamente sós, e ainda alguns Padres de que não ha tanta segurança; o receberem e escreverem cartas sem as mostrarem ao superior e semelhantes que V. R. como esta ao pee da obra, terá visto.

Pollo passado lembramos que soposto que esses Japões servem mais em dojucus que sendo sacerdotes, ou entrando na Companhia ainda que desto os não excluimos totalmente, he bem ir lhes tirando a occasião da tentação que he aprender tanto latim no que tambem se escusarão gastos, o mesmo tornamos de novo lembrar na forma e moderação que ja dissemos.

Dizem nos que essas residencias no campo entre gente pobre são de poco proveito e de muito risco a esses Irmãos Japões, e ainda aos outros, V. R. consultara este negocio, e o remediara conforme ao que se julgar ser necessario.

Visto que o Padre Valignano escreveu depois de tam larga experiencia e o que mostrarão depois esses annos; he necessario apertar muito a mão, e ir muito atento assi em receber na Companhia como no ordenar sacerdotes os Japões, e assi senão fosse nalgum caso muito raro em que podera o Provincial ouvidos os consultores fazer o que in domino julgasse, avisando nos logo do que se tem feito de certo nos pareceo ordenar que não receba os taes nem os admitta a ordens sem

由此可见，虽然教会在日本活动必须获得日本人协助已得到认可，但在教会内部，日本人并未被赋予相同于欧洲人的平等地位，他们始终处于同宿的地位为教会服务，并只被教授给这种服务所必须的知识。

耶稣会本部关于日本人入会以及被叙阶为神父的方针，已从原来的立场大幅度倒退，入会门槛受到严格控制。可以认为，上述命令的大部分内容，或可视为日本及澳门耶稣会传教士有关此事的消极观念或反对意见的反映。而由于耶稣会总会长确定了上述方针，积极推进日本神父叙阶的热情趋于消沉。

至此，始于巡视员范礼安与布教长卡布拉尔的争端，即是否培养日本神父的争议，以否定意见占压倒优势的结局而告终。

我个人对范礼安推动培养日本神父的心情不无共鸣，但当时的江户幕府已发布全国性禁教令，教会活动困难重重。以长崎为例，敢于藏匿天主教传教士，或收留相貌奇物的欧洲神父的日本基督徒越来越少。据前引斯皮诺拉 1614 年 3 月 23 日于长崎写给耶稣会总会长的信件，日本基督徒此举是因为日本神父较易藏匿。但斯皮诺拉并未因为日本神父的便利因素而稍有通融。在他看来：“在长崎本地，为协助主教工作的少数日本神父必不可少，但除此之外，无论耶稣会神父或教区神父，日本神父的数量都不必过多。”他还声称：日本圣职人员“必须到此为止。如果他们数量过多，肯定会自封上长，并希望用他们自己的方式管理教会。”

然而，此后不久，日本教会的处境日趋恶化，虽然耶稣会本部仍持否定态度，但日本神父还是得到叙阶。究其原因，或许是更易潜伏的日本神父具有越来越明显的必要性。为应对江户幕府严厉的禁教政策，日本耶稣会违反了本部指令。在禁教令波及全国的 1610 年代后半期，未修习完必要知识的几位日本修士被叙阶为神父，并投身于日本教会的活动之中。^①

上述情况的典型事例，或可见证于曾作为天正遣欧使节一员，前往罗马的中浦朱利

depois de o consultar ahi nos mandar informação, e esperar nossa reposta.

Os dojucus consequenter não he bem que aprendão latim, pois isto lhe servira de fomentar tentações, e assi desejamos que V. R. de tam bem nisto boa ordem, e faça que o não aprendão, senão fosse com alguém que pera serviço das missas ou pera se servir dalgumas autoridades no pregar no catecismo se julgasse necessario ensinarlhe somente o que pera este effeito lhe basta, posto que nos dizem que com os livros que de novo se estampão se podera suprir este effeito. E assi neste particular nos remetemos a V. R. que vera com esses padres o que mais convem.»

^① 参照高瀬弘一郎：《澳门神学院的改组及其日本学生》，《基督教时代的文化诸相》，第 2 部第 10 章。

安的履历。中浦 1610 年前往澳门，大约于 1604 年返回日本，并在 1608 年被叙阶为神父。中浦的学习成绩见于 1603 年澳门神学院制作的名册。^①其曰：“中浦朱利安，今年完成了伦理神学第三年的授业。”顺便说一句，中浦是当时在澳门神学院注册学习的 8 位日本学生中的一人。

由修士晋升为神父，必须完成拉丁文，伦理神学，哲学课程，教理神学等不同阶段的学习，但日本基督教日趋严峻的实际情况，已经不允许日本修士做如此长时期的学习了。

不言而喻，如此培养紧急避难中的日本人，并将其迅速叙阶为神父，已经与范礼安主张的 *Acomodatio*（适应主义）的理念的实现毫无关系。

由于未能在澳门神学院进行过严格学习，日本修士曾为此颇多苦恼，关于此事，或见证于科斯塔（Nicolau da Costa）1612 年 2 月 26 日于日本写给耶稣会总会长助理马斯卡莱尼亚斯的信件。据科斯塔所言，由于“天性自由”，滞留于澳门的日本修士在进入秩序严谨的神学院后，甚至一度患上“忧郁症”（*malenconia*）。科斯塔还记述道：“我询问了他们中的一人，他视我为朋友，想告诉我产生忧郁的原因。经再三请求之后，他对了说了这样的话：*Spectaculum factismus*（我们被当成小丑）。”^②

科斯塔此信还提到了返回日本的中浦朱利安。虽然未能完整学习作为神父所必须的学问，但他们有可能成为基督的见证人。这一点在中浦身上得到了证明。1632 年末被捕于北九州小仓的中浦，于 1633 年 10 月 18 日被带至长崎西坂丘刑场，在那里受到名为“穴吊”的酷刑拷问。

所谓“穴吊”，是将受刑者全身涂满污物，倒着吊入土坑之中，他全身被紧紧地捆绑，有一只手是自由的，随时可发出弃教信号。由于头部快速充血，受刑者会很快死亡。为防止他们速死，耳朵旁开有一个小洞，鲜血从中滴下，以延续最后时刻的到来。受刑者的意识会陷于极度混乱，由于基督徒绝对不允许咬舌等手段自杀，禁教当局设计“穴吊”的意图是想慢慢折磨基督教传教士，不让圣职人员与信徒光荣殉教，在无尽的痛苦中使之屈膝（叛教）。

在经过数次“穴吊”后，中浦于 10 月 21 日殉教。与中浦一起被吊入土穴的，还有身为日本耶稣会最高上长的葡萄牙神父维埃拉（*Christóvão Ferreira*），维埃拉在第一天

^① 高濂弘一郎：《澳门神学院的改组及其日本学生》，《基督教时代的文化诸相》，第 452—453 页。

^② *Jap.Sin.*15-I, ff.118, 118v, 119. 高濂弘一郎：《澳门神学院的改组及其日本学生》，《基督教时代的文化诸相》，第 446—450 页。

的严刑拷打中就屈服了，他后来改名泽野忠庵，成为江户幕府的爪牙，协助其禁教政策的实施。

最令人感到不可思议的是，在欧洲耶稣会士冷漠日本修士，并对其采取不公平待遇的情况下，甚至还有日本人不依赖耶稣会，立志凭一己之力，成为教区神父。

这个日本人就是荒木托马斯。荒木以自己出身卑贱为由，拒绝进入耶稣会教育机构。后独自一人前往罗马，凭借优秀的拉丁文能力，受到枢机卿贝拉米诺的宠爱，不久升为神父。荒木 1614 年 8 月 7 日抵达澳门，稍事滞留后，返回禁教下的日本，但不久亦叛教，成为迫害者的爪牙。

荒木回国途中曾在澳门滞留，他当时对仍然想成为耶稣会神父的日本同宿说，可以选择离开耶稣会，去印度或欧洲，在那里成为教区神父。相关情况，保存在 1618 年 3 月 5 日帕西科（Francisco Pacheco）于日本写给耶稣会总会长的信件之中。^①

关于滞留澳门期间与日本耶稣会士的谈话，荒木在 1620 年 3 月 20 日于长崎写给耶稣会总会长科罗斯（Matheus de Couros）的信件中亦有记载。荒木还在信中提及西班牙系统的托钵修士征服日本的计划，以及葡萄牙系统的耶稣会神父的抵抗。其曰：“当我在马德里时，就听说托钵修道士们正在游说国王，试图征服日本，并听说耶稣会士正在抵制这一企图。”^②但信中所说的日本教会对西班牙势力入侵的“抵抗”，并不意味着耶稣会神父没有武力征服日本的野心。可以想象，由于对欧洲世界及其殖民地实态有详尽了解，无论是对西班牙系统的托钵修会，或者葡萄牙系统的耶稣会，基于日本人立场的荒木都会对修会主导下的传教工作与殖民地主义列强间的密切联系有着强烈的怀疑。

对于日本人摆脱修会控制，自主意识的广泛流行及其独立行为，日本耶稣会的上长们极为讨厌和恐怖。维埃拉在 1618 年 1 月 18 日于澳门写给耶稣会总会长助理的信中，很不高兴地提到滞留澳门的几位日本同宿违背耶稣会的意志，前往印度，进而前往罗马的企图，并特别提到了荒木托马斯。他希望罗马的神父们“不要对这些举止轻浮的家伙（vagabundo）轻易施恩，”因为他担心他们回到日本，“会干出许多令人憎恶的事情来。”

^③维埃拉的担心不幸被他言中，荒木回国后果然迅速叛教，并成为禁教政策的协助者。

^① Jap.Sin.36, ff.113v, 114. 高濂弘一郎：《叛教神父托马斯·阿拉基》，《基督教时代对外关系研究》，第 12 章，第 603—604 页。

^② Jap.Sin.35, f.137. 高濂弘一郎：《叛教神父托马斯·阿拉基》，《基督教时代对外关系研究》，第 608 页。

^③ 高濂弘一郎：《叛教神父托马斯·阿拉基》，《基督教时代对外关系研究》，第 614 页。

说得不客气一些，对日本人评价极低，散布污蔑日本人的种族歧视言论，自己关闭了合作之门的日本耶稣会，是被荒木这样具有强烈自主意识的日本人所报复了。

耶稣会理所当然地将回国后的荒木称为背叛者“犹大”，但关于叛教后的荒木的本意，我们必须在此附上以下信息。根据科罗斯 1621 年 3 月 15 日于日本写给总会长的信件，荒木曾在长崎代官村山当安的家中表示，其曰：“基督的律法或许是真实的，但神父在日本传播它的意图，则是想让日本服从他们自己的国王。”^①

由此可见，通过传达传教士“真实声音”的教会未刊史料，日本学者的研究已经领先于欧洲学者，从而揭示出天主教会中丑陋无比的事实真相。就此而言，天主教史学者高濂弘一郎的工作可谓前无古人。

在公众眼里，传教士的正面形象是克服禁教压力下所有困难，推进福音传播的英雄。但我们决不可忽视耶稣会上长们不为人知的其它阴暗面。

作为日本准管区长巴范济的继任者，首任日本管区长卡瓦略（Valentim Carvalho）神父是 1614 年禁教令发布时日本耶稣会的最高上长，但在如此困境，卡瓦略的所作所为，与其说是一位圣职人员，还不如说已经触犯“七大罪”之一的“贪欲”。在全国禁教令发布之后，卡瓦略于 1614 年避走澳门，但当时残留在日本的科罗斯 1616 年 2 月 15 日于谏早致耶稣会总会长的信件记录：“管区长卡瓦略将 1000 克鲁扎多的私人资产存放在本管区的管区代表手中，他试图借贷这些钱使之增值。他还用这些钱随心所欲的消费，从中获得极大快乐。……他在日本国内的世俗者家中保存着大量食品，如葡萄牙的葡萄酒，弗兰德斯奶酪，还有一个塞满其它物品的食品柜。对此，该管区的管区代表斯皮诺拉神父告诉我说，如果出售它们，价值 200 克鲁扎多以上。管区长卡瓦略不仅保存它们，还规定管区代表和管区长代理都无权动用它们。”^②

关于管区长卡瓦略如此利欲熏心，当事者斯皮诺拉神父在 1616 年 3 月 18 日于长崎写给耶稣会总会长的信件中也有记述，他声称，由于上长的“恶劣榜样”，“奢靡习气与某种私有观念被导入支到耶稣会会员中间。”^③

^① Jap.Sin.17, f.128. 高濂弘一郎：《叛教神父托马斯·阿拉基》，《基督教时代对外关系研究》，第 605—606 页。

^② Jap.Sin.35, ff.49-50. 《耶稣会与日本》，第 420—429 页。

^③ Jap.Sin.36, ff.179v-180.

«ma el padre provincial che haveva d'essere il primo a dare esempio à i sudditi, senza farmi a sapere cosa veruna, mandò a depositare à diversi luoghi, non solo i suoi libri, scritti, et l'altre cose del vestito, et uso particolare, ma anche molti scrittorii, et cascie piene di corone, Agnus Dei coverti di seta, vasi de vetro, et cose curiose de varie sorti per dare di presente

在前引 1616 年 2 月 15 日的书信中，科罗斯亦对“过度爱好娱乐和音乐”的管区长卡瓦略的习癖表示非议。他说：“在日本，该神父常常在夜里 10 上床睡觉，但同时他会将一位修士唤到自己的卧室里，让他弹奏维哦拉，并演唱有助睡眠的，曲。”科罗斯对卡瓦略的这些指责，会让人想起“七大罪”之一的“懈怠”。

提到“七大罪”，我们还可以在葡萄牙传教士的信件中看到他们触犯其中“贪食”的记录。它通常只会表现在饮食很少的日本人身上。据科罗斯 1619 年 9 月 25 日于长崎写给耶稣会总会长的信件中，此事竟然发生在为整肃耶稣会风纪而来到日本的巡视员维埃拉神父身上。科罗斯在揭发道：“人们认为这个老人（维埃拉）是贪图安乐之人。在饮食方面，他的这一奢好表现得尤为突出。……在斯皮诺拉被逮捕的次日夜里，他急忙离开长崎市。他坐船巡视肥后诸岛，然后从那里前往高来。在从上（京都，大坂）返回后，一直滞留于高来。他常常从那里（高来）给当地送来目录，亲自定购食物。现在也是如此。这些食物有雏鸡与母鸡。牛肉他只吃牛腰部的肉（lombo）。这也有定购。就连为他服务的日本仆人也告诉同胞说，他每顿饭要吃一只鸡。这是真实的。由于杏仁只能经澳门从霍尔木兹（Ormuz）运来，所以在当地极为昂贵，但他还是定购了 manjar-real（一种用鸡肉，面粉和杏仁制作的食物），他还订购了自己所喜好的某种保存食物（conservas），油炸面包（pão fresco），麻花面包（rosca），以及他非常喜欢的水果。在有梨子的季节中，在梨芯上挖个洞，填入砂糖，用火炉烧烤后，作为饭后甜点。他还常常在吃煮蛋时还加糖。”

如果有人认为日本天主教會的灭亡，是由于江户幕府残酷而狡猾的禁教政策，那么这种看法是不对的。在面对迫害基督徒的时候，耶稣会不仅放弃与日本人协作之道的认真探索，而且还自陷于腐败颓废的泥沼，丧失了传教日本的真摯热情，是他们选择了“自我毁灭”之路。

alli christiani, et alli signori gentili in maggiore quantita di quelle che io teneva per provvedere la provincia tutta; ma ancora molti vasi di varie confettione di zuccaro, barili di vino Europeo, et dell'India, et altre cose comestibili, che erano della sua dispensa particolare, et l'anno passato havendo di raggione di mandare al padre superiore universale, o a me le chiavi, mando il suo dogico di puoca età con le chiavi di Macao, perche areggiasse li paramenti di messa, et vestit, et gli portasse a Macao alcuni libri, et altre cose necessarie, [...] et con questo esempio male si ponno riformare i suditi, anzi da questa sollecitudine delli superiori d'accumulare molte cose, et havere la sua dispensa proveduta di tutte le delisie, con cappa di presenti, et di convitare li Giaponesi, si è introdotta la superfluità, et alcuna proprietà nelli nostri, come dicono li scrittori antichi che avvenne alli Monachi dell'Egitto, et di Palestina, che cominciando a procurare alcuna comodità per accarezzare li peregrine, si fù rilassando la religiosa disciplina;»